

# 病児保育と愛着形成

病児保育は親子間の  
愛着形成を阻害しない

西岡敦子 香川県西岡医院  
病児保育室レインボーキッズ

# 愛着障害がみられた6か月女児

- 生後6か月： 母親が当院子育て支援センターに泣きながら電話をかけてきた。  
「あやしても泣き止まず叩いてしまった。どうしていいかわからない」との訴えがあり、スタッフはすぐに受診を勧めた。
- 受診時の対応：
  - 医師・・・患児の診察
  - 心理士・・・母親のカウンセリング
  - 保育士・・・患児を預かる
- 外部機関との連絡・調整（市の育児訪問事業担当者・児童相談所）を行った。
- 早急な母子分離の必要性を考え、「子どもと離れたいが、乳児院には入れたくない」という母親の希望を考慮しつつ、父親とも話し合い、保育所入所まで日中は病児保育室を利用し、夕方からは父親が育児に加わることになった。

# 患児が病児保育を利用するにあたって の保育スタッフの共通理解

- 患児に対する配慮  
愛着形成のため、できるだけ同じ保育士が1対1で保育に当たる（相互作用と接触を重視）。
- 母親に対する配慮  
送迎時にゆっくり話をする時間を取る。  
安易に励まさない。  
穏やかに対応する。  
不安なことをゆっくり語ってもらえる関係づくり（受容と共感）。

# 病児保育室での患児の経過

- 6か月（受け入れ当初）  
無関心・無表情・不活発で愛情遮断症候群の症状がみられた。
- 7か月（受け入れ1か月後）  
昼寝の時間が増えてきた。  
スタッフが部屋を離れると不安そうな顔つきをする。  
喃語が聞けるようになった。
- 9か月（受け入れ3か月後）  
スタッフの膝に手をかけて抱いて欲しそうにする  
（愛着関係の成立）。  
知らないスタッフに声をかけられると知っているスタッフにしがみついてくる（人見知り）。  
ついに笑い声が聞けた！

# 母親支援

- 母親は、子育ての大変さを愚痴ったり、些細なことを質問するようになった。
- アルバイトを始め、生活リズムが整っていった。
- 少しずつ母子愛着関係が形成されていった。
- スタッフが保育所と何度も連絡をとり、入所に向けての準備を進めていき、入所に至った。

